農業部会

研究主題　　「授業の改善計画などを踏まえた、わかる授業の工夫・改善」

Ⅰ　主題設定の背景及び理由

農業部会による過去３年間の研究開発委員会は、観点別評価規準の作成、生徒による授業評価の実践的方式について研究開発してきた。これは、基礎・基本の確実な定着を図り、自ら学び自ら考える力など、生きる力を育成するという新学習指導要領のねらいの具現化に向けた取組である。特に、授業とその評価方法に着目することで、指導と評価の一体化を図り、学習内容の確実な定着と、「確かな学力」育成のための授業改善策の開発を目指してきた。昨年度は、これらの研究成果を踏まえ、教員集団としての力を発揮できる学校づくりという観点から、生徒による授業評価を活用し、学校が組織的に授業改善に取り組む方途についての研究実践に取り組んだ。

学習指導要領にも示されているように、農業教育の特徴の一つは、実際的、体験的、探求的な学習である実験・実習を十分に配当し、知的好奇心を喚起し、実践的な知識と技術を確実に習得させることである。これらを達成するための効果的な指導方法として、従前から、少人数による班別学習やティーム・ティーチング等を実施し、授業改善に創意工夫を重ねてきた。このような取組を通して、複数の教員が連携をし、授業改善に取り組むという素地はあるものの、これが学科単位又は学校全体としてシステム化されていないのが現状である。生徒による授業評価等を活用して、教員一人一人が自らの改善目標を設定し、自分の力で改善することは重要なことであるが、個人の力には限界がある。

今年度は以上のことを踏まえ、個人の力、個人の情報を組織として共有し、改善策を検討し、共通の課題設定の下で、組織的な実践力を高めるための具体的な方策や授業改善を図るための方法について研究した。

教員が互いに授業を見せ合い、学び合い、相互連携を通して、生徒の実態に応じたよりよい授業、わかる授業づくりを推進していくための具体的な指導方法の研究開発について報告する。

Ⅱ　研究の方法

1　授業改善計画の作成

各学校で実施している生徒による授業評価の評価計画を基に、委員の担当する科目の特性や生徒の実態等を踏まえた評価項目を設定し、生徒による授業評価を実施した。授業改善の効果をより高めるため、得られた授業評価結果からさらに、評価項目の検討を行い、授業改善計画を作成するという方法をとった。

2　指導方法の工夫・改善

学科内で検討された「授業改善計画」に基づいた授業を実施し、「生徒による授業評価」を再度行った。改善前の「生徒による授業評価」と比較し、分析した結果を基に、学科、教科、学校全体で校内研修を実施する。「生徒による授業評価」から明らかになった課題とその改善策の共有化を図り、生徒の視点に立ったわかる授業の工夫・改善を行った。

また、「生徒による授業評価」を活用し、生徒の学習への振り返りを通して、学習意欲を高め、自ら主体的に学ぶ姿勢を身に付けさせるための授業について検証を行った。

Ⅲ　研究の内容

1　指導事例 No. 1　「授業改善計画」を活用した「組織的な指導体制」づくり

〔科目名：「総合実習」（４単位）　対象学年：第２学年〕

（１）はじめに

昨年度より、食品製造科の教員全員が担当している「総合実習」において、「生徒による授業評価」を活用した「組織的な指導体制」づくりに取り組んできた。その結果、「確かな学力」の定着に向けた、緻密かつ組織的な教科指導が行われてきているとの共通認識も得られた。しかし、組織的な指導体制が完成されたとは言い難く、未だ指導の統一性がとれていないのが現状である。

そこで、昨年度同様に「総合実習」における「生徒による授業評価」及び「授業改善計画」を活用して、更なる「組織的な指導体制」づくりに取り組んだ。

（２）授業評価結果及び分析

①　授業改善計画

計画１：実習教材を体系化・スリム化する

・シラバスを作成・配布し、学習内容理解や学習意欲の喚起を図る

計画２：生徒がより理解しやすいように、教材プリントを改善する

・実習の目的やその原理を理解させる「実習前説明プリント」を導入する

・文字での表現を減らし、図絵や書き込み欄を多く取り入れる

・計算方法をより分かりやすく表記する

計画３：実習内容の理解を促すよう、意識して生徒自ら考える機会を与える

・生徒の作業する機会（時間）を増やす

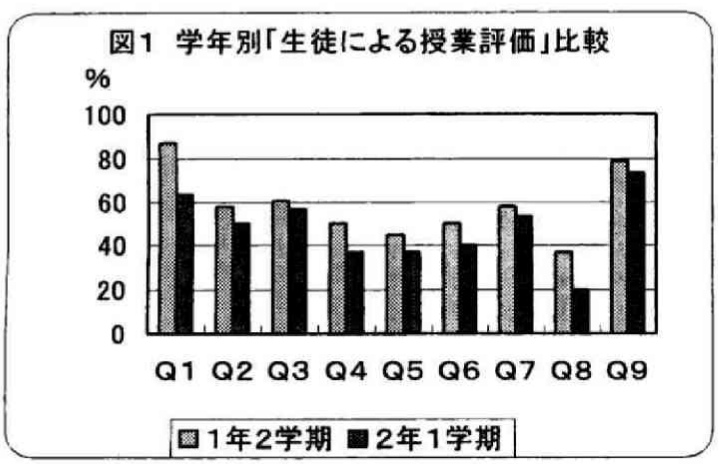
・使用器具や使用機器の名称をその都度確認させる

計画４：校内研修会を実施する

・毎定期考査期間中に、食品製造科職員の教科指導及び指導方針の共通認識を深める研修会を開催する

②　評価結果及び分析

「生徒による授業評価」を年間計画に基づき、学科ごとに評価項目を策定し、６月２４日に実施した。図１は、各評価項目での「４:そう思う」と「３:やや思う」の肯定的割合の合計値を第１学年２学期と第２学年１学期(今回)で比較したものである。



Q１：説明する声はよく聞き取れる。
Q２：説明は分かりやすい。
Q３：授業内容に興味がわいた。
Q４：黒板の字は見やすい。
} 技術

Q５：生徒には公平に接している。
Q６：質問にきちんと答えている。
Q７：熱意をもって指導している。
} 姿勢

Q８：授業内容は分かりやすい。
Q９：授業内容は将来役に立ちそうだ。
} 内容

この評価結果を基に、7月上旬に授業改善会議（学科内研修会）を開き、「学ぶ態度」を身に付ける指導を継続するとともに、新たな改善点を追加設定し、9月以降の授業改善を図ることにした。

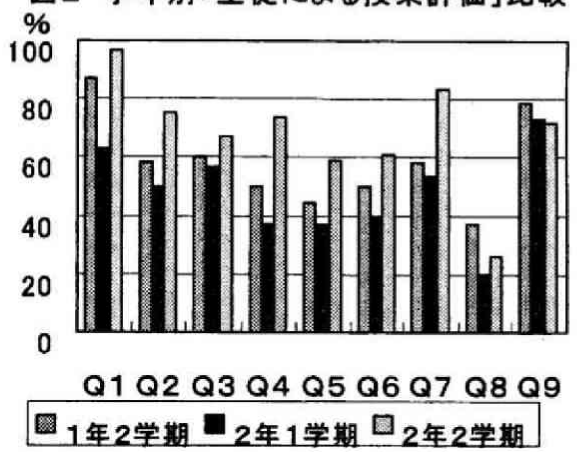
改善1　食品系分野に一層の興味・関心をもたせ、学習内容の理解を深めさせるために、「食品製造」「食品化学」「食品流通」の各講義科目の学習内容が相互にリンクしていることを授業や実習の中でより意識させる。

（3）改善結果及び考察

2回目の「生徒による授業評価」を9月17日に実施し、食品製造科教員全員で評価分析及び考察を図った。図2は、授業改善前と改善後で比較（グラフ化）したものである。

① 「項目1・2・3・4」（技術）及び「項目5・6・7」（姿勢）ともに、今まで以上に実習での説明表現をより容易にするなど、学科教員全員で「ていねいに分かりやすい授業を」と臨んだ。その結果、多くの項目において授業改善の効果が見られた。

図2　学年別「生徒による授業評価」比較



② 「項目8」（授業内容）は多少の向上は見られるが、依然として半数以上の生徒は不満の回答をしている。生徒の要求レベル（授業内容・指導方法）と食品製造科の目標達成レベルに開きがある（差が大きい）と考える。生徒の要求レベルを検証する必要性を食品製造科の今後の課題として共通理解をした。

（4）まとめ

表1は、「授業改善計画」に対しての達成度（100点満点）を教員個人と学科（食品製造科）全体の面から食品製造科の全教員が自己採点した結果である。今回の取組を通じて、改善策の共有化を図るなど「組織的な指導体制」づくりが昨年度以上に進んできていることが検証できた。

今後も、食品製造科教員による学科における評価がより100点に近づくよう、継続的な授業改善と実践を重ねていくとともに、本校教員の更なる資質向上にもこの取組を活用していきたい。

表1　教員による自己評価・学科評価結果

	計画1	計画2	計画3
教員自身	42.5点 52.5 100	57.5点 66.7 100	52.0点 62.5 90.0
食品製造科	40.0 62.0 87.7	61.0 74.0 81.9	58.0 65.0 85.1

上：16年9月　中：同年12月　下：17年10月

2　指導事例 No. 2　生徒による授業評価を基にしたわかる授業への取組

〔科目名：「総合実習」（３単位）対象学年　第１学年、第２学年、第３学年〕

（１）はじめに

東京都では、生徒による授業評価が導入され、「個に応じた授業」や「わかる授業」への改善が進められてきた。しかしながら、よりよい授業への取組をしていく上で、一層の工夫、改善を行うことが必要である。そこで、生徒による授業評価をより細かく分析するため評価項目を６項目から２２項目に増やし、授業改善計画を立て研究した。

（２）授業評価結果及び分析

今回の授業評価は、１年生から３年生まで統一して行い、科目は総合実習に絞って行った。自己評価、授業評価共に「よくあてはまる」「あてはまる」が、ほとんどの項目において８０％以上の値であった。ただし、「食品についてより科学的に考えるようになりましたか」「相変わらず授業内容は難しい」など８０％に達していない項目もあり、授業改善が必要であると考える。教室での講義中心の科目と違い実習中心の科目である総合実習（食品製造分野・分析実験分野）を分析した結果は、おおむね良好の結果が得られた。総合実習は、クラスを３分割した少人数で各分野の実習を行っており、生徒は毎週ローテーションで入れ替って各実習を受講している。分野ごとに実習プリントの量に違いがあり、プリントの見やすさを検討する必要性がある。黒板の板書もおおむねよいとの評価であるが、今後さらに見やすくするような工夫をするべきである。３年生では和菓子の講座を開講しているが、ここ数年生徒に意識の変化がみられ、「和菓子の技術を身に付けたい」「和菓子の歴史を知りたい」とう意欲をもって授業に臨む生徒が少なくなっている。これらの点を総合的にみて、生徒たちに授業に対する興味・関心や学習意欲を高めさせるための授業改善が必要と考えられる。

（３）授業改善計画及び改善策

①　教材、副教材などの工夫及び生徒の授業に対する学習意欲の向上

ア　プリントの用紙サイズを統一し、見やすく内容の充実を図る

イ　食品の各分野に興味をもたせるような授業の展開

ウ　生徒の苦手とする計算、化学式についてわかりやすい授業を展開する

エ　板書の字を見やすくする。

オ　系統立てた黒板の利用を考える

②　実習、実験の操作手順の明確化

ア　実験実習の工程ごとに説明を行い、授業を進めていく方法

イ　実験実習のすべての工程について時間をかけ説明する方法

ウ　今回行う実験実習全体像について説明し、各工程もしくは区切りのよいところまでの説明を行う方法

③　３年間の授業内容の体系化

実習　１年生・食品に関する基礎学習及び基礎技術の習得

２年生・大量生産を体験し、生産品の流通、販売など総合的に学習を行う

３年生・和菓子製作を通じてより高度な専門技術の習得

実験　１年生・・基礎的、基本的な実験の技術の習得と実験器具の名称を覚える

２年生・・基礎分析法の知識と技術の習得

３年生・・食品・栄養分析のできる人材の育成を目指す。課題研究や食品科学実験などの科目とリンクして行う

④　３年間の学習内容の体系化

ア　各学年における学習項目を設定する

イ　専門教科と普通教科が、連携し情報交換を密にする

⑤　各学期に校内研修を実施

ア　生徒の状況についての情報交換

イ　各科目の進行状況に関する意見交換

ウ　専門教科における科目間の連携を図る

（４）改善結果及び考察

表２　授業評価アンケート結果

			改善前				改善後				改善前				改善後				改善前				改善後			
			1年				1年				2年				2年				3年				3年			
観点	項目	評価項目	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
自己評価に関する項目	1	あなたは、先生の注意を良く聞き、安全に心がけていますか	71	26	3	0	60	37	3	0	71	29	0	0	69	31	0	0	57	40	0	3	39	61	0	0
	2	この授業に意欲的に取り組むことができましたか	71	23	6	0	71	23	6	0	57	40	3	0	49	49	3	0	53	43	3	0	39	61	0	0
	3	使用器具、機械は正しく使用できましたか	57	37	6	0	63	31	3	3	66	31	0	3	46	49	6	0	50	47	3	0	45	42	13	0
	4	あなたは、授業を受けて、実験・調査技術が向上してきたと感じていますか	51	46	3	0	46	49	3	3	51	43	6	0	46	51	3	0	47	53	0	0	45	48	6	0
	5	授業内容は自分なりに理解できましたか	34	63	3	0	37	51	11	0	46	51	3	0	43	49	9	0	33	60	7	0	23	65	13	0
	6	「食品」についてより科学的に考えるようになりましたか	29	49	23	0	31	51	17	0	43	29	23	6	46	26	28	0	20	50	30	0	39	35	26	0
	7	「食」が身近に考えられるようになりましたか	46	51	3	0	51	40	9	0	66	34	0	0	49	40	11	0	40	47	13	0	42	45	13	0
	8	授業を通して自分の知識を広げることができましたか	49	43	9	0	54	43	3	0	66	31	3	0	54	43	3	0	50	47	3	0	39	52	10	0
	9	この授業を楽しく受けることができましたか	69	29	3	0	60	31	9	0	69	31	0	0	49	49	3	0	50	43	7	0	48	52	0	0
	10	次回この授業を受けることが楽しみである	69	26	6	0	60	31	9	0	63	31	6	0	46	46	9	0	33	43	23	0	35	52	13	0
授業評価に関する項目	1	授業では、手順や行程について詳しく説明されていましたか	54	37	9	0	57	37	6	0	51	49	0	0	49	49	3	0	37	47	17	0	42	55	3	0
	2	先生は、生徒の安全について十分配慮していましたか	63	34	3	0	69	23	9	0	71	29	0	0	51	49	0	0	60	37	3	0	55	45	0	0
	3	授業では、具体的な技術の指導が適切に行われていましたか	54	37	9	0	54	37	9	0	63	34	3	0	63	34	3	0	43	50	7	0	48	52	0	0
	4	説明する声は良く聞き取れるようになっている	63	29	9	0	66	29	6	0	60	37	3	0	46	49	6	0	47	47	7	0	32	61	6	0
	5	説明はわかりやすくなっている	54	40	6	0	51	34	14	0	54	40	6	0	57	37	6	0	30	57	13	0	26	58	16	0
	6	授業内容は興味がわくようになっている	43	51	6	0	51	43	6	0	49	51	0	0	40	51	9	0	27	57	17	0	35	48	16	0
	7	黒板の字は見やすい	37	51	11	0	43	40	14	3	40	46	11	3	40	54	6	0	30	53	17	0	35	58	6	0
	8	生徒に公平に接しているようになっている	49	46	6	0	49	40	9	3	51	40	9	0	49	49	3	0	33	50	17	0	32	55	13	0
	9	生徒の質問にきちんと答えるようになっている	63	31	6	0	51	37	11	0	54	37	3	0	69	31	0	0	40	47	13	0	42	55	3	0
	10	熱意を持って指導しているようになっている	66	31	3	0	57	37	6	0	46	51	3	0	37	60	3	0	40	47	13	0	52	48	0	0
	11	相変わらず授業内容は難しい	63	37	0	0	49	40	11	0	31	34	23	11	31	40	29	0	37	43	20	0	58	29	13	0
	12	授業内容は将来役に立ちそうだ	66	31	3	0	57	37	6	0	69	23	9	0	57	40	3	0	50	30	20	0	55	35	10	0

4:よくあてはまる　3:あてはまる　2:ややあてはまらない　1:あてはまらない

１学期に行った生徒による授業評価の結果と、授業改善計画を基にして２学期に行った授業評価の結果では、それほど大きな結果としての変化は見られなかった。いくつかの自己評価の項目において「あてはまる」から「ややあてはまる」に下がってしまったものもある。アンケートを行う時期や授業内容により生徒の興味の違いにも原因があると考えられる。前述のような授業改善を行ったが、数値としては、変化はあまり見られないが、授業の内容によっては、授業展開の順序を変えることで「わかりやすかった」という生徒の意見が増え、改善の効果が見られた。

（５）まとめ

授業が一つの科目だけで完結するのではなく、学科や教科といった大きな枠組みの中で組織的に展開されることにより、生徒の授業に取り組む姿勢が改善され、授業に対する関心が高まった。授業評価を行い、授業改善を行うことで、各単元（項目）ごとに生徒の興味・関心、意欲を、把握することができ、「生徒にわかりやすい授業」「個に応じた授業」につなげていくことができた。

3　指導事例 No. 3　ビデオ撮影を活用した授業改善

〔科目名：「環境科学基礎」「測量」（２単位）対象学年：第２学年〕

（１）はじめに

今までの授業では教材を工夫し、板書をしながら説明をしてきたが、生徒の集中力が持続せず、生徒の私語が止まなかったり、生徒の学ぶ意欲を十分に引き出す授業が行えていない実態があった。この課題の原因を明らかにするため、授業の様子をビデオで撮るとともに、生徒による授業評価を繰り返し行い、その結果を基に、教員間で授業改善に向けた検討を行った。

（２）授業評価結果及び分析

平成１６年度の生徒による自己評価によると、授業が始まる前に授業の準備ができている生徒は５６％であった。学習意欲をもち、真剣に授業を受けている生徒は１０％、普通に授業を受けている生徒は７０％で、授業に消極的な生徒は５％であった。

また、生徒による授業評価の結果では、授業の内容を理解している生徒は約７０％であり、同一授業者による科目のばらつきはなく、「おおむね良好である」との緑地環境科の見解となった。

平成１７年度の生徒による授業評価による結果は次の表のとおりである。質問事項は関心・意欲・態度、思考・判断、技能・表現、知識・理解等を主とした下記の項目である。

表３　授業評価結果　　**単位：％**

		項目	改善前				改善後			
			4	3	2	1	4	3	2	1
自己評価	1	授業が始まる前に準備ができていましたか	19	44	31	6	17	58	17	8
	2	授業に集中できましたか	13	62	19	6	33	26	33	8
	3	わからない事を質問しましたか	0	44	38	18	8	26	33	33
	4	授業内容について自分なりに理解しましたか	13	56	25	6	33	50	17	0
	5	この授業は楽しく受けた	5	67	28	0	33	26	33	8
授業評価	1	授業において説明する声は良く聞き取れますか	13	68	19	0	25	68	7	0
	2	説明や黒板の文字は見やすくわかりやすいですか	6	69	19	6	33	46	15	6
	3	授業の内容を理解できましたか	19	43	38	0	17	59	16	8
	4	知識や技術が身に付いたと思いますか	0	63	37	0	17	33	42	8
	5	授業の進度についていけますか	13	54	33	0	17	50	25	8

評価点　4：そう思う　3：ややそう思う　2：あまりそう思わない　1：そう思わない

生徒による授業評価を１学期から２学期にかけて３回行い比較した。その傾向は、同一授業者が担当するすべての科目において同様であった。

生徒の意識は、数値と自由意見から明らかになり、生徒の自由意見欄には次のような記述があった。

① 板書の文字が一定でなく、読みにくい。

② 説明が早口なので、どこが重要な点なのかわかりにくい。

③ 質問されることがないので、集中力が持続しない。

この結果を踏まえ、学科の教員間で検討を重ね、問題点を明らかにして改善策を立てた。

板書を改善するために、板書の必要性について下記の２つの方法で授業を実践した。

方法１．板書をしない。この場合は、教材として詳しいプリントを用意する。

方法２．板書をする。内容のガイドラインを示したプリントを用意する。

上記２通りの授業を行った。その結果、「生徒による授業評価」では、板書をしたときの方が、詳しいプリントを配布するより、生徒は理解しやすいという結果が得られた。

（３）授業改善計画及び改善策

① 板書の改善点

ア 字の大きさについては、細かい字をなくし、大きい字にする

イ 内容を強調する場合、赤色より目立つ黄色で色分けする

ウ 板書の量が多い時は、内容の説明をゆっくり進める

② ビデオで撮った授業からの改善点

ア 声にメリハリをもたせ、教える内容を正確に伝える

イ 机間指導を行い、一人一人の様子を観察する

ウ 生徒への質問を行い、双方向の授業を行う

エ 生徒全体を見渡し、生徒の授業に対する意欲や関心を把握する

（４）改善結果及び考察

改善後の自由意見欄には次のような記述が表れた。

① 字が大きく見やすくなった

② 書き込み欄があるプリントはわかりやすい

③ 授業の集中力やメリハリが出てきたので重要な点がわかるようになった

また、板書の内容が予想できるサブノート形式のプリントを使用することも、授業内容の理解には効果的である。

（５）まとめ

ビデオで撮影した授業を見ることは、自分の授業を客観的に見ることができるので、より効果的な授業改善が行える。そして短期間に授業改善の方向性を定めるには、適した方法である。また、生徒に学習中の自分の姿を見せることにより、生徒自身の自己評価を高める動機付けにもつながる。

問題点を意識し、改善策に留意して授業を行ったが、数値的には大きな変化は表れなかった。しかし、自由意見欄に授業改善の成果が記載されるようになるなど、生徒による授業評価は今後も継続し、生徒の実態に即した授業改善を図っていく必要がある。

4　指導事例 No. 4　　学校間連携科目での授業評価を基にした授業改善（異なる学科の生徒と共に学ぶ授業）

〔科目名：「自由選択・園芸デザイン」〔２単位〕対象生徒：本校・学校間連携校３年〕

（１）はじめに

３年生に学校設定科目である「園芸デザイン」（自由選択科目）を設置している。この科目は、学校間連携として本校食品科の生徒と、近隣都立高校普通科の生徒が履修できる。連携校の履修生徒は、園芸デザインの学習は初めてである。１学期の授業では、生徒に希望する作品のアンケートを実施し、それを取り入れる形で授業を展開した。１学期末の授業評価アンケートにより、生徒の実態を一層把握することができ、生徒一人一人に即した補助教材を工夫することによる授業改善を行った。

（２）授業評価結果及び分析

表４　授業評価結果　　単位：％

			4		3		2		1	
自己評価	1	授業に意欲をもち取り組んだ	80	100	20	0	0	0	0	0
	2	自分で考えようとしている	20	65	80	35	0	0	0	0
	3	教わった技術が役立そうだ	80	65	20	0	0	35	0	0
	4	授業内容がわかる	80	65	20	35	0	0	0	0
授業評価	1	先生は生徒の質問や発言に対応している	100	100	0	0	0	0	0	0
	2	先生の声の大きさ、速度は丁度いい	100	100	0	0	0	0	0	0
	3	授業の重要なところわかる	60	100	40	0	0	0	0	0
	4	成績の付け方がわかる	80	65	20	35	0	0	0	0

評価基準　４：そう思う　３：だいたいそう思う　２：あまり思わない　１：全く思わない

注：表数字・・・（左は本校、右は連携実施校）

〈自由意見〉

本　校　・授業時間が少なかったのでもっと授業を受けたかった。授業は毎回楽しかった
　　・ブーケを作るのが楽しみ
　　・色々なことをもっとやりたい。もっと授業時間を増やしてほしい
　　・とても楽しい授業。今まで知らなかったことを習えて本当によかった

連携校　・授業はすごく楽しくておもしろいので、いつもすごく楽しみ
　　・花束を作ったりするのは楽しくて、意外と自分にむいていた
　　・２学期も同じくのんびりとした楽しい授業を

（３）アンケート結果の分析による授業の問題点、授業改善点及び授業改善計画

学科教員間で、アンケート結果による授業の問題点を探り、それを基に授業改善策を検討した。

表５　授業改善計画

授業の問題点	授業改善点	授業改善計画
生徒が、授業中に自ら考えようとする態度がみられない	生徒の理解度に応じた質問を行い、考える力を養う	生徒が自ら考える補助教材を取り入れ、活用する
連携実施校で、教わった技術が役立つとはあまり思わない生徒がいる	園芸デザインが、どのように自分の生活に役立つのか考えさせ、認識させる	園芸デザインが、実生活の中で果たす役割について、工夫した補助教材を作成する
授業の重要なところの理解度が低い	授業の重点をくり返し伝える	小テストを行い知識の定着を図る

（４）改善結果及び考察

表６　授業評価結果　　単位：％

			4		3		2		1	
自己評価	1	授業に意欲をもち取り組んだ	80	100	20	0	0	0	0	0
	2	授業中、1学期よりも自分で考えようとしている	10	80	90	20	0	0	0	0
	3	教わった技術が役立ちそうだ(自分で作れそうだ)	35	90	65	10	0	0	0	0
	4	授業内容がわかる	80	90	20	10	0	0	0	0
授業評価	1	先生は生徒の質問や発言に適切に応えてくれる	100	100	0	0	0	0	0	0
	2	先生の声の大きさや、授業の速度は丁度いい	100	100	0	0	0	0	0	0
	3	授業の重要なところがわかる	35	100	65	0	0	0	0	0
	4	成績の付け方がわかる	100	100	0	0	0	0	0	0
	5	応用作品の紹介は、今後の参考になった	20	40	80	60	0	0	0	0

評価基準　4：そう思う　3：だいたいそう思う　2：あまり思わない　1：全く思わない

注：表数字・・・(左は本校、右は連携実施校)

［授業改善計画］

ア　本校生徒に対して、自ら考える場面をより多く設定するため、配布するプリントを生徒の進度に応じた工夫したものとする

イ　連携校の生徒に対しては、興味・関心を一層高めるためにも、より多くの応用作品を具体的に示し、作製させる指導を行う

ウ　本校及び連携校の生徒に対して、授業の重要なポイントや手順を正確、かつわかりやすく理解させるため、生徒の実態に合った補助教材を工夫して作品製作の指導に当たる

（５）まとめ

専門学科と普通科の異なる学科の生徒を対象にした授業で授業評価を行い、生徒の興味・関心に大きな違いがあることが明らかになった。生徒の興味・関心に基づき授業改善を行い、異なる学科のすべての生徒にとって魅力ある授業となる工夫を行った。学校間連携を進める中で、今後もお互いの生徒の実態を十分に把握していくことが必要である。

Ⅳ　研究のまとめ

1　研究の成果

農業科においては、従前から班別学習による教員のティーム・ティーチングが行われ、科目間における意見交換や授業に対しての協議は日常的に行われてきた。しかしながら、教科内で年間授業計画、週ごとの指導計画やシラバスを活用しながら十分な連携が図れていたとは言えなかった。「東京の教育２１開発委員会」での３年間の評価規準等の研究を踏まえ、授業の全体像を共有しながら指導に当たる体制が農業科でようやく確立されてきた。

今年度の研究主題である、「授業の改善計画などを踏まえた、わかる授業の工夫・改善」の実践を通して、教員が互いに学び合う土壌が農業科では醸成された。その土壌をさらに発展させるためにも組織的な実践力を養成することが求められる。今回の研究では、「総合実習」、「環境科学基礎」、「測量」、「園芸デザイン」における授業改善を実践することにより、校内研修の取組を農業科の小学科から農業科全体、学校全体へと広げていくことができた。今回の取組を通じて一つの科目だけでなく、学科、教科を越えた大きな枠組みの中で組織的に授業改善が展開されるようになり、生徒の授業に取り組む姿勢や学習に対する関心が一層高まった。教員間で共通の課題をもつことにより、互いの連携が深まり、共に学び合い、鍛え合う機運を高めていくことができた。

生徒による授業評価は、教員の指導方法の改善を図るための情報を得るためである。また、わかりやすい授業にするためにはどのように改善すべきかを生徒と共に考える視点をもって授業改善を図っていくことが大切である。生徒は授業を振り返ることにより、自ら主体的に学ぶ姿勢を身に付けるためのよい機会となった。評価結果を踏まえた指導は、生徒の視点に立った授業改善となり、生徒の学習意欲をさらに高めることとなる。したがって、授業改善に必要な評価項目を適切に設定していくことが重要となる。生徒による授業評価を実施するには、全教員が生徒による授業評価の趣旨を正しく理解し、積極的かつ謙虚な姿勢で取り組むことが大切である。本研究を通して、教員全体が主体的に取り組める体制が今回の実践校で確立されたことは、今後へつながっていくものと期待できる。

2　今後の課題

本研究の目的は「東京の教育２１研究開発委員農業部会」の委員が中心となり、継続的・組織的に授業改善を図るための指導体制や組織づくりを通して、研究から各学校における自主的・自律的な授業改善を全教員で行うことにつなげることである。

今後は、農業の各科目の評価規準をより適切に見直すとともに、指導内容を明確にし、生徒に年間の授業の全体像を示しながら、興味・関心を一層引き出し、わかる授業の工夫と実践を行うことが必要である。教員は実験・実習内容の深化には熱心になりがちであるが、今後は評価や指導方法についても、校内研修を通じてさらなる研鑽が必要であり、そのためにも農業各校における校内研修の活性化に期待したい。

本研究が、農業科の専門教育をはじめ、普通教科における授業改善の指針となり、生徒に「自ら学ぶ力」や「確かな学力」を身に付けさせることにつながることを期待したい。